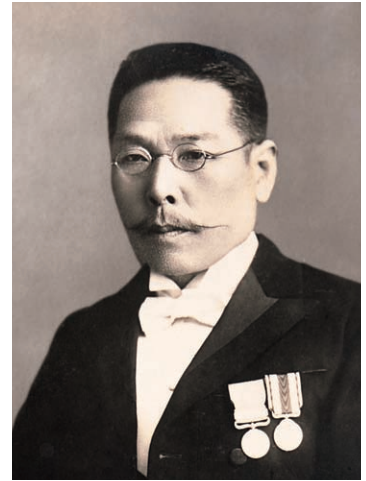




人々の快適な暮らしと 国の発展を目指して、 貿易立国に尽す

うえ やま えい いち ろう
上山 英一郎 (1862~1943年)



■大日本除虫菊 株式会社 (金鳥)

本社所在地：大阪市西区土佐堀1-4-11
創業：1885(明治18)年1月8日
事業内容：家庭用殺虫剤、衣料用防虫剤、家庭用洗浄剤、防疫用殺虫剤、トイレタリー製品の製造および販売

従業員数：478名 資本金：4億4,000万円
設立：1919(大正8)年4月21日

除虫菊との出会い

上山英一郎は1862(文久2)年、みかんの生産地として有名な和歌山県有田郡山田原(現・有田市)に生まれた。上山家は代々温州みかんの栽培を生業とし、その当時ですでに300年以上の歴史を持つ国内でも有数のみかん農家であった。英一郎は東京の慶應義塾で学んだ後、郷里に戻り実家で栽培しているみかんを輸出しようと、1885(明治18)年、22歳で上山商店を設立した。

上山商店を立ち上げたこの年、英一郎は慶應義塾での恩師である福沢諭吉の紹介で、来日中であったサンフランシスコの植物会社社長 H・E・アモアと会うことになった。日本のみかんや珍しい植物を求めて日本を訪れていたアモアを自家の柑橘園に案内し、みかんをはじめ、竹、棕櫚、葉蘭、秋菊などの苗を添えて渡した。アモアの帰国後の翌1886(明治19)年、そのお返しとして植物の種が何種類も送られてきた。その中に「アメリカではこの植物を栽培して巨万の富を得た人が多い」というメモ書きのついた一袋の種があった。これが英一郎と除虫菊の出会いであり、日本での殺虫剤工業の始まりであった。



除虫菊の花

除虫菊の普及に向けて

もともと除虫菊はユーゴスラビア(現・セルビア共和国)が原産地で、その効用が14~15世紀に発見されたと言われている。当初は観賞用の植物であったが、ある女性が枯れた除虫菊を捨てておいたところ、その周りで虫が何匹も死んでいるのを発見した。以来、その花の殺虫効果が研究されるようになった。当時のアメリカではインセクト・フラワーと呼ばれ、日本ではシロバナムシヨケギクと名付けられた。海外では収穫した花を乾燥させて粉末にし、ノミ取り粉として使われていた。

実は、英一郎が除虫菊の種を手に入れる前に内務省衛生局が除虫菊を試植していたのだが、結果は学術的な実験栽培に終わってしまったと見られ、農商務省から各地区への奨励も地元の勧業員と呼ばれる地方役人の理解不足から、普及するまでには至らなかった。

除虫菊はマーガレットによく似た白い花をつけるが、マーガレットとは違い、痩せた土地でも繁殖する特徴があった。「これを副業にすれば、貧しい農家を救うことができるのではないか。そして、すでに除虫菊が活用されている海外への輸出品として育てれば日本は自立できるのではないだろうか」そう考えた英一郎は全国へ栽培を奨励して回ろうと決意した。



除虫菊栽培書

恩師・福沢諭吉の思いを胸に

除虫菊播種の翌年には収穫からノミ取り粉への加工も成功し、自信を得た英一郎は東へ西へと日本全国を栽培奨励の旅で行き来した。交通機関も発達していない当時、日本全国を移動するだけでも相当な労力であったが、外国から輸入したばかりの植物を、参考文献も何もない状況で輸出商品にまで育て上げようと奔走した英一郎の苦労は想像に難くない。現に当時の英一郎の手記には「熱心の奨励を狂人視して甚だしきは利を貪らん山師なり」と、保守的な農家たちから詐欺師に疑われたエピソードが記されている。どんなに悔しい思いをしても除虫菊の普及をやめなかったのは、福沢諭吉の薫陶を受けて以来、英一郎の脳裡には常に“貿易立国に尽す”という理想があったからであった。

1888(明治21)年、上山商店を上山英工場と改め、除虫菊を加工する工場を建設した。英一郎の努力が報われたのか、徐々に和歌山県の内外から畑や工場に見学者が訪れるようになり、周辺の農家でも除虫菊を栽培する人が少しずつ増えてきていた。しかし、全国行脚による奨励に限界を感じた英一郎は、除虫菊の栽培法等を書いた「除虫菊栽培書」を発刊し、全国関係者へ無料配布した。

日本の発展という大きな目標

1 892(明治25)年、英一郎の活動に注目した新聞にその活動が取り上げられると、続いて他紙も同様に報道し、たちまち全国に注目され普及への大きな支えになった。マスコミの影響力を知った英一郎は、数紙に「除虫菊種苗分与ス」という広告を出したところ、全国から注文が殺到した。すると、和歌山県の有志50名が、除虫菊栽培事業を法人組織にして発展させようという主旨で会社設立を決議した。そして、出資者の多くが「除虫菊を地元の独占事業にして利益をあげよう」と言うのに対して、英一郎は「種苗も資本も公開して、全国的に栽培普及を図るべきだ」と主張して譲らなかった。英一郎は推薦された社長を辞退し、会社も即日解散となった。英一郎が個の利益ではなく、日本という国の発展を選んだ結果であった。



妻ゆきと渦巻型蚊取り線香

世界初の蚊取り線香 誕生

ようやく除虫菊の普及、量産への途に明かりが見え始めていたが、英一郎は課題を抱えていた。それは、主にノミ取り粉として粉状のまま使用される除虫菊粉を、もっと軽便に多用できる方法はないかということである。日本は古来から蚊に悩まされており、その蚊を追いつぶすために除虫菊を用いることはできないかと考えていた。

まず、昔ながらの蚊遣り火にならって、除虫菊の粉をおがくずなどと混合し、火鉢や香炉の灰の上でくすぶらせた。しかし夏に火鉢の取り合わせと、この方法では大量の煙が出て灰が飛び散ったりする。「もっと手軽な方法を見つけ出したい。」全国農家への普及活動の途次でも、考えるのはそのことばかりだった。

ある日、東京の旅館に泊まっていた英一郎は、線香屋の息子だという人物と出会い、話をしているうちに除虫菊粉を線香に練り込むことを思いついた。早速、市販のノミ取り粉を買い込み、竹筒を利用して試作してみたが、手間がかかってとても量産できそうになかった。いろいろと試した結果、英一郎は仏壇線香の職人を雇い入れ、1890(明治23)年、世界初の棒状蚊取り線香の製品化にこぎつけた。これで空間を飛び回る蚊も退治できるようになったが、棒状では40分ほどで燃え尽きてしまう上に煙の量も十分でなく、効果を発揮させるためには一度に2~3本焚かなければならなかった。

内助の功が生んだ「金鳥の渦巻」

英一郎は線香の改良に取り組んでいた折、妻のゆきから「線香を渦巻型にしてはどうか」という言葉かけられた。確かに、棒状よりも渦巻型の方が長い時間、たくさんの煙を出すことができる。英一郎はすぐに菓子の打ち抜き木型を真似て渦巻型を彫り、それに原料を詰めて押し出すという方法で試してみた。しかし、木型から線香を取り外すのに手間がかかり、このままではとても量産できない。工夫に工夫を重ねてたどり着いたのは、太い棒状の線香を一定の長さで切り、木で作った芯を中心にして2本ずつまとめて巻くという方法であった。残る課題は乾燥方法であった。板の上で乾かすと線香がくっつき、夏場には原料中の糊が腐敗してしまうという問題があった。この問題を解決したのはまたもやゆきであった。金網の上で乾燥させるというアイデアを出し、実際にこの方法が最もうまくいった。渦巻型を着想してから7年もの歳月を経て、1902(明治35)年、渦巻型蚊取り線香は世に売り出された。

夢に見た輸出を成し遂げ

蚊 取り線香の開発に取り組みながらも、英一郎は除虫菊の輸出への道をさぐっていた。1903(明治36)年、日本の除虫菊は大豊作となった。相場は暴落したが、英一郎は契約通りの価格で買い上げ続けた。滞貨は増える一方で破産寸前まで追い込まれる状況となり、もう輸出しかないと外国商館巡りを始めた。当時、海外との取引には外国商館を経由するのが一般的で、本格的な輸出を図るためには、どうしても横浜や神戸にある商館の門を叩かねばならなかった。しかし、世界に門戸を開いたばかりという時代背景から、欧米先進国の商館は日本人の番頭でさえ高官並の気位の高さであり、ましてや紹介者なしで飛び込みをかける英一郎の話をもじめに聞いてくれる商館は皆無であった。

そんな折の1904(明治37)年、日露戦争が開戦。それを聞いた英一郎は、先の日清戦争では疫病での死者が多かったことから、除虫菊粉を満州派遣軍へ寄贈した。すると軍から大量発注があり、値段の下がった除虫菊は人気がなく誰もが手放していた為、英一郎に注文が集中し、価格も大幅に上昇して倒産の難を逃れたのである。さらにこの年、ヨーロッパの除虫菊は大凶作となり、外国商館から除虫菊輸出の引き合いの連絡も入って来た。ここで英一郎の商館巡りが実を結んだのだ。これが契機となり、日本における除虫菊の栽培輸出は成長し、世界各地に販路を拡大していくことになった。

英一郎の持ち前のひたむきさで除虫菊の大量輸出、海外販路開拓を実現させ、1935(昭和10)年には、日本の除虫菊生産は世界の90%を占めるまでになり、世界一の輸出量を誇り、日本の輸出品の中で除虫菊関連商品の番付は、20位前後にランキングされ、除虫菊は多くの外貨を稼ぎだし、日本経済の発展にも大きく貢献したのである。



英一郎夫妻に贈られたユーゴスラビア名誉領事の身分証と玉璽

現在も愛される「金鳥」ブランド

渦 巻型蚊取り線香発売から8年後の1910(明治43)年、英一郎は自社の製品に「金鳥」のブランドを制定し、商標を登録した。「金鳥」の商標は、中国史上初の歴史書「史記」に出てくる「蘇秦伝」の一節、『鶏口となるも牛後となる勿れ(牛の尻尾のようになるのではなく、小さくとも鶏の頭のようにするべきだ)』に由来しており、今後も常にトップメーカーであり続け、品質、信用、経営、どの角度から見てもナンバーワンであり続けるという英一郎の決意が表されている。



「金鳥」マークの変遷

同じ年の10月、英一郎が行ってきた除虫菊の導入から栽培の奨励、製品化、輸出に至る努力が認められ、48歳の若さで藍綬褒章が下賜された。また、1929(昭和4)年には、除虫菊の用途を開発し、効率のよい栽培方法を考案して生産量を拡大したことを称えて、除虫菊の原産国であるユーゴスラビアから大阪駐在ユーゴスラビア王国名誉領事に任命された。

英一郎の思いは代々引き継がれ、同社で次々に開発される除虫菊製品は広く世界に普及し、蚊などによって媒介される疫病から人々を救い続けている。

長年の功績が認められ、2013(平成25)年に蚊取り線香に関連する資料が未来技術遺産に登録、さらに2017(平成29)年には線香関連資料に加えて日本最初のエアゾールであるキンチョールが化学遺産に認定された。

現在、同社は総合衛生企業から健康創造企業へと、人々の健康と日本の発展を見つめ続けた英一郎のたゆまぬ情熱を受け継ぎ、新しい伝統づくりを目指して世界へのさらなる挑戦と躍進を続けている。



現在販売されている製品群